

科目：日文作文

系所組：日本語文學系碩士班

【問題】昨今、日本や台湾では妖怪を題材にした書籍、小説、漫画やアニメ、ゲーム、などが数多く出版・発売されたり、舞台劇が上演されたりしています。以下の文は、加門七海という作家が妖怪について書いたものです。以下の文章を読んで、①～③までの問い合わせに答えてください。

①下線部Ⓐでは筆者加門七海は、「それほどに妖怪たちはいないものだとされています。私はそれが腹立たしい。だから妖怪をフィクションとして扱うような本は読まない。——妖怪はいる。」と言っていますが、加門はどんなことに対して「腹立たしい」と思っているのでしょうか。200字程度で説明してください。(20%)

②下線部Ⓑでは「妖怪はすべてから名と姿が失せれば、妖怪達が人間の歴史に留まるのは難しい。あまりに、それは寂しいことだ。だが、最近、私はそれでもいいのではないかと考えている。」と言っていますが、加門が「私はそれでもいいのではないかと考えている」のは、どのような理由があるからでしょうか。「名」と「姿」「形」の関係に触れながら、200字程度で説明してください。(20%)

③以下の文章全体を踏まえて、600字以内であなたが考えたことを自由に書いてください。どんな切り口からでも構いません。

★ただし、「踏まえて」という条件がありますから、問題文が提起していることとあまりにもかけ離れた内容のものは、減点の対象になります。また、字数は守ってください。大幅な増減があれば、減点の対象となります。(60%)

* * * * *

怪談が好きな人間は、怪談を読んだり書いたりする。

私もそうだ。

そして、怪談好きの対外は妖怪も好きで、妖怪に関する本も読んだり書いたりする。私もそうだーーと、続けたいところだが、私はなぜか妖怪を記した書物とは距離がある。

妖怪が嫌いなわけではない、好きだ。けれども、殊更、本を読もうと思ったことはない。なぜなら、そのほとんどがフィクションとして認識され、語られ、描かれているからだ。

実際、怪談実話の本はあっても、妖怪実話の本はない。怪談実話で妖怪的な存在が語られることがあるけれど、裏の川をのぞいたら小豆洗い^{ことさら}※1がいて……などという話は出てこない。

一方、怪談における「トイレの花子さん※2」は妖怪的存在とも言えるのだが、こちらは声を聴いたとか姿を見たと言った話が実話として載ることがある。

※ 注意：1.考生須在「彌封答案卷」上作答。

2.本試題紙空白部份可當稿紙使用。

3.考生於作答時可否使用計算機、法典、字典或其他資料或工具，以簡章之規定為準。

それでも、妖怪図鑑に載るようなモノの話は滅多^{めつた}にない。多分、そんな話を眞面目にすれば、嗤^{わら}われて、頭を疑われるのがオチだと思うからに違いない。

Ⓐそれほどに妖怪たちはいないものだとされている。私はそれが腹立たしい。だから妖怪をフィクションとして扱うような本は読まない。

——妖怪はいる。

だが、それは水辺で小豆を研ぐ変なおっさんが、存在するというのとは違う。出会ったら、命を取られるという話とも違う。

川で聞きなれない音がする。小豆や米を研ぐような音がする。でも、正体は分からぬ……。本当の話とは、そういうものだ。

かの水木しげる先生※₃も「“妖怪”には形がない。すなわち“感じ”とか“音”とか“気配”とかといったものだ。」と記している。(『水木しげると妖怪たち 見えないけれど、そこにいる』筑摩書房 二〇一六年)

そんな現象が一定地域や全国で断続的に報告されると、共通の原因が求められ、やがて名が付き、姿を得る。

人間は視覚優位の生き物なので、まず、物事を目で見て判断しようとする。ゆえに、一旦、姿が与えられると、たとえ想像・連想された仮の姿だとしても、それを第一としてしまう。結果、小豆洗いは目の大きいオッサンの妖怪として認識され、「実際に、そんなものはいない。あの音は錯覚が幻聴だ」という、つまらない話になっていくのだ。

視覚化された妖怪がアニメになったりフィギアになるのも、想像によって形作られたモノという「安心感」が一役買っているに違いない。

私はそれが気に食わない※₄。しかし、これは仕方の無いことかもしれない。前掲書にて、水木しげる先生はこうも記している。

「なにも見えない“妖怪”を、なにもみえないからとそのままにしておくことは、人間にはできない。」だから、『百鬼夜行絵巻』を描いたとされる土佐光信※₅も、『画図百鬼夜行』を描いた鳥山石燕※₆も、そうして水木しげる先生も、描くことで妖怪を捕らえ、表そうとしたのだろう。

確かにこれらの作品は、妖怪の存在を世に知らしめた※₇。が、我々をその分眞実から遠ざけてしまったようにも思われる。

妖怪だけではない。神も、自然現象も同じだ。

人は万物に名と姿を与えることで、納得する生き物だ。

たとえば、空にとどろく音と光を「雷」と言い、鬼に似た姿を与えて「雷神」とすること。突然の暴風雨を「台風」と言い、横殴りの雨を「台風が来ているから」と納得すること。

現象と名前の有無は本来別のものなのに、名前があるというだけで——即ち名付けに至った過去の例があるというだけで、人は安心しまう。そして、型に嵌^はめた分、現象に対峙したときの純粹な感動や恐怖を失う。

※ 注意：1.考生須在「彌封答案卷」上作答。

2.本試題紙空白部份可當稿紙使用。

3.考生於作答時可否使用計算機、法典、字典或其他資料或工具，以簡章之規定為準。

だから私は安心なんぞしたくない。もし川縁から小豆を研ぐような音が聞こえたら、そして、その音にゾッとしたなら、「小豆洗いだ」なんて思う暇を設げずに、即座にその場から立ち去りたいのだ。

「“感じ”とか“音”とか“気配”といったもの」には、敏感であり続けたいと思っている。

しかし、すべての妖怪に形がないわけではない。

私は過去、河童を見た人の話も聞いたし、一反木綿^{※8}らしきものを見たという人の話も聞いた。彼らの話は皆、人口に膾炙している妖怪とは微妙に異なっていて、その分、リアリティに溢れていた。ただ水棲のナニカを「河童」と言い、「一反木綿だったのかなあ」と、当て嵌めて考えてしまった時点で、彼らはやはり安心していた。危機管理としてはリスク一^{※9}だ。食われるかもしれないのに……。

だが、しかし。

「幼い頃、住んでいた場所は、道に立つと正面におにぎりみたいな山が見えたの。夕方だったかなあ、あるとき、その道を通ると、大人の人が数人、ポカンと山をみていていたのね。なんだろうと思ってそっちを見たら、山の上に大きな案山子^{※10}が立っていた。離れた山のてっぺんにあるのに、案山子だってわかるくらいの、木よりずっと高い、大きな案山子。みんな呆然と黙ったまま、それを見ていた。私もじっと案山子を見た。そうしたら、そのうち、案山子はずっと空に上がって消えちゃってたの。消えたら、みんな不思議そうな顔をしながら、何を喋るでもなく、バラバラに立ち去っていってしまってね……」

得体のしれない、本当にわけのわからないモノに対して、人はうまく反応できない。ゆえに、なかつたこととして封印してしまうのだ。

そうでなければ、不安で怖くて、おちおち生きてもいられなくなる。だから、やはり、姿があっても名前は必要なのだろう。留めるという意味においては、妖怪にとっても名は要るだろう。

名づけもされなかった現象は、人の記憶の闇に落ち込む。歴史においても民俗学においても留まることなく失せていく。

⑧妖怪はすべてから名と姿が失せれば、妖怪達が人間の歴史に留まるのは難しい。あまりに、それは寂しいことだ。だが、最近、私はそれでもいいのではないかと考えている。

名と形から開放し、彼ら妖怪たちを得体の知れない存在として闇の中に戻すこと。恐怖と不気味さの中に宿らせること。

それが妖怪の尊厳を守るということではないのか——と。

そんなふうに考えている。

加門七海「妖怪の尊厳」『ユリイカ』2016年7月号より

* 注意：1.考生須在「彌封答案卷」上作答。

2.本試題紙空白部份可當稿紙使用。

3.考生於作答時可否使用計算機、法典、字典或其他資料或工具，以簡章之規定為準。

- ※1 小豆洗い：妖怪の一種。小豆研ぎともいう。ショキショキという音をさせて川で小豆を洗う妖怪。「小豆洗おうか、人取って食おうか」という歌を歌っていることもある。
- ※2 トイレの花子さん：学校のトイレにいるとされる女の子の妖怪。
- ※3 水木しげる先生：(1922~2015) 日本のマンガ家で妖怪研究家。代表作は「ゲゲゲの鬼太郎」。日本の妖怪漫画の第一人者。京極夏彦など影響を受けた作家が多い。
- ※4 気に食わない：不満だ。好きではない
- ※5 土佐光信：(1434~1524) 室町時代中期から戦国時代にかけての大和絵の絵師。
- ※6 鳥山石燕：(1712~1788) は、江戸時代中期の画家、浮世絵師。妖怪画を多く描いたことで世に知られる。
- ※7 知らしめた：知らせた 認識させた
- ※8 一反木綿：妖怪の一種。空を飛ぶ一反ほどの布で、人にまとわりつくとされる。鹿児島県に伝わる。
- ※9 リスキー：危険の多いさま。冒險的。
- ※10 案山子：田畠を荒らすスズメなどを脅して追い払うために田畠に立てる、竹や藁で作った人形。

※ 注意：1.考生須在「彌封答案卷」上作答。

2.本試題紙空白部份可當稿紙使用。

3.考生於作答時可否使用計算機、法典、字典或其他資料或工具，以簡章之規定為準。